

性格は主として母に由るもの、如し (完)

幼稚園の遊戯 (其六)

松村 ひさ

保母は遊戯の時間をあまり永くしてはならぬ。もしあまり永すぎると、しまひには子供の心をも身体をも治めて行く事のできぬ様に、よく統御もできぬ様になつて来る。

之は遊戯に限らず何でも幼児にさせる事はあまり長くつゞけ過ぎると、幼児は倦み疲れて興味を失ひます。そうして元氣なく沈むとか又は氣晴らしにさわぐとかいふ風になります。こうなると先生の命令などはあまり守られず、幼児は自然に各勝手な休息法をとり又は變化を好む天性を満足させん爲にさまざまの事をはじめま

す。之を制して保母が或命令を出す、守らぬといふ風ではよほど訓練上害のある事で、其此處まで至らぬ間即ち或事をして居つて佳境から段々倦むといふ場合に進まぬ迄にやめてしまふ事が必要であらうと思ひます。

保母はあまり多くを言つて自家の品格を下げてはならぬ、王位に居つて確固たる力を保ち隠然たる勢力を以て幼児の指導者となつて居る様でなければならぬ
自發活動を許すは大切な事であるが、之が嵩じて幼児をして亂暴にならしめるやうな事があつてはならぬ

活潑と亂暴、之は稍もすればまちがひ易く、之位は活潑でよいと思つて居ると何時の間にか、亂暴に流れてしまひ、之を御して行き又矯正して

行くのに大きに骨が折れるとか、又は當然制すべき幼児の亂暴なる言行を活潑なりとして捨て置くうちに益亂暴な兒になつてしまふなどはよくある事かと思ひます。私共は幼児を眞に良い意味の活潑な兒にしなければなりません。これには協同遊戯を甘く用ひて行くといふ事が必要でございませう。

遊戯は幼児の經驗内に於て理解されるものを教へねばならぬ、即ち其年齢の幼児の智識思想によく適して居らねばならぬ。あまり大人びた事を教へ過ぎて幼児を早熟させてはとりかへしがつかぬ。智慧のない譯の分らぬ人を見て感服し、幼児であつてあんな事がよくもできたもの、とはめる様な遊戯をさせて得意になつて居るなどは、まちがつた話である。

保母は幼児に對して兵隊扱に手足をどうして居れどか頭をこういふ風にとか、あまり身体に付ての位置などをやかましく言うてはならぬ。こういふ方にあまり注意を向けると用心の遊戯に對する興味を幾分か減じ感情を殺ぐものである。

保母は幼児の内の二三の者の爲にばかりなる様な遊戯を何時でもするといふ風ではよろしくない。少くとも幼児全体の喜を結合するものであるべきである。

保母は或特に發達した幼児が何時でも或遊戯の必要な部分を占めるといふ風にしむけてはならぬ。何となればこういふ風にされると進んだ幼児が日光の恵に浴して居る間に、他のあはれな小さい兒は段々日陰の方で退歩して行く。

之は多勢の幼児を集めて一緒に教育して行く場

合に必ず注意しなければならぬ事でございませう。たとへば或一人の有力な兒が何時でも先登になる、あとの兒は何時でもくっついて歩くばかりといふ風な事になりますと兩者の力のへだちりが益々多くなりまして全体の爲になりません。それよりは全幼兒のどの兒でも先登になるだけの力を有つて居るやうに導くのが、多數の兒を預つてなるべく一同を良く教育して行く私共の責任でございませう。

保母は天氣に由つて適當な遊戯をするやうに、幼兒の心身の發達に適當する様に氣を利かさねばならぬ。たとへば寒い空氣の乾いた日に高い聲のいる様な事をしたり、暑苦しい日に蒸氣罐の遊をするなどはいづれも適當に撰み得たりとは言はれぬ

(完)

保母の讀みものは澤山にある

東洋幼稚園保母 岸邊 福雄

昨年末頃の本誌上に、東君が翻譯して掲載された、エー、エル、ハヴ君の、米國セントルイス博覽會幼稚園教育部會に報告中、日本の幼稚園は近年長足の進歩をして、其數も少なくないが、只だ恨らくは、此の教育に従事せる保母の研究に當てたる書物が皆無の姿であるから、一向に進歩改良が出来ないとの意味に付き、一般の保母達が、如何なる感じを以て讀了したかと思ひ、其後小生の幼稚園に來觀した人々、並に知人のものどもに、實際保母の研究する書物がなにかと問ふて見ると、いづれも同感との事である。なかには幼兒教育を無視する結果だなど、憤慨様の氣焔を吐くのもあった。